

## 客船「にっぽん丸」で航く ～海から岐阜へ～

“世界農業遺産 清流長良川の鮎”の文化を楽しむクルーズ(横浜～名古屋) 筆:柳田幸子

日時 2017年6月12,13日(月・火) 晴天☀☀ (田村伴次さんにつば丸乗船より全行程、わたくしは岐阜ツアー)

今後具体化するであろう「クルーズ旅客の広域観光回廊の取組み」に対し、私はオプションツアーに参加した。岐阜ツアー出発までの1時間、ふ頭で私の出来ることといえば、ここに来て良かった、名古屋港に降り立って良かった、と旅の思い出になる「名古屋港」が記憶に残るようならば。陽に焼けようが黒くならうが構わない・・・と。でも現実には陽に焼けたあとのことを考えるとショックは大きい。後々メンテナンスが大変だ。でも、出会いは嬉しい!



この日は、予定通り「にっぽん丸」はガーデンふ頭に入港。早くからお迎えのひと、写真を撮りにきているひと、まばらではあったがどの顔も満面の笑みを浮かべていた。あるカメラマンは、私の問いに「毎回入港するたびに、ガーデンふ頭も金城ふ頭も出掛けるよ。大きな船は格好いいね! 撮影甲斐がある📷」と気さくに笑ってくれた。ご夫婦で「にっぽん丸」の船首に大きく手を振りワクワク

した顔で見つめている先には、何人かの仲間がいるようだ。合間をみて声を掛けてみた。「知人がね、乗っているんだよ～。クルーズ大好き人間の集まりの仲間だ。待ち遠しいよ。ほらね、あそこ。あそこ。」このことがご縁でお仲間の皆さんとも仲良くなれた。降り立った皆に駆け寄って握手やハグ、ハイタッチ、肩をたたき合い、肩を組む。嬉しさを表現するのは本当に沢山あるものだ。



このご主人が私のもとへ、「ねえ、写真を撮ってくれないか!」「もちろんですとも!」こういうことをするために私は来ています! たくさん撮りますよ! 仲間のひとりがカメラマンになると全員が写らない。みんなのカメラで撮りまわし



ても同じこと、だれか、がいない。やっぱり全員揃わないと! こんなこともあり、ほんのひとつではあったが40年も続く、とあるクラブの存在を垣間見れた。左の写真は「ようこそ名古屋港へ」国土交通省職員手作りの力作👏の横断幕で皆を歓迎。この取組みをととても感激したひとは多い。

いよいよ田村さんと“世界農業遺産 清流長良川の鮎”の文化を楽しむ、岐阜観光ツアーへ出発。私は、この美濃、関、川原町は大好きなエリアだ。幼少より幾重にも家族で訪れている。佇まい、美濃和紙の質感、温かさ、鮎料理、(特に稚鮎の季節は外せません。) 郷土文化遺産がぎゅっと詰まっている。この時期「稚鮎」を楽しめる天然鮎フルコースを選んでいるのは、さすが地元ならではの旅行会社のセンスがきりり★☆自然豊かな「小瀬鵜飼」侘び寂び。知り尽くしているからこそこの選択。現役の鵜匠から直々の鵜飼話を聞くことも、鵜の仕事中! ではないOFFモードの様子もうかがえた。私は天然鮎の美味ささと地酒を堪能、楽しいおしゃべりに夢中になりすぎ、全料理を写真に残すことをすっかり忘れていたことに帰りのバスの中で、はっ!!! と気が付いた。でもこの時期のみしか味わえない「稚鮎の姿寿司」はちゃんと残していた。



な、なんとグロテスク🐞・・・と思うひと。これは、絶品です!! この時期どうかお見逃しなく!

「うだつの上がるまち」で入った酒屋さんの奥さんが、建物の築年数、帳場など丁寧な説明。天井のあかり取りのカッコよさ、いくつもの籠が設置されているのは、「火事になったときに、物を入れてみんなで担ぐのよ。ご近所さんもみんな助け合いでね。」昔はこのようにどこのお宅にでもあったそう。すごく珍しい、びっくり。美濃和紙の手すきを見られることが出来たらよかったが、少々時間が足りません🐣



ユネスコ無形文化財登録が最も多い愛知、岐阜。このお祭り文化が残るからこそ、日本伝統工芸が伝承されている。新しいもの、伝統あるもの、県や市、町、村、を越えていろいろな特色をPRでき、みなとに着いたら旅の終わりではなく、“みなと”から始まる、文化・美食の旅に裾を広げ繋がっていく美味しい旅、お腹いっぱい旅が出来上がり。おっと、ワスレテはいけない! 「長良ぶどう→天然酵母天然発酵ワイン、堂上蜂屋柿→千年の歴史“最高峰”干柿の王様、山の上の梨→良質土壌で育ったみずみずしい甘味。」などなど豊富で高品質なブランドフルーツの存在を!

夜の伝統文化の楽しみも多く残る愛知・岐阜。「篝火の美しさ・小瀬鵜飼」、「柔らかなひかり・美濃和紙あかりアート」、水系にも恵まれている地域ならではの、「杉玉・美味しいお酒を仕込む酒蔵めぐり🍶」もできる。このようにクルーズ船名古屋港寄港時期とさまざまな旬の時期が重なれば、見どころもところもおなかもいっぱい、宝物はいっぱい。